

今月の谷口雅春先生のお言葉

# 相手と和解するためには

「暗黒」を光明化しましょう

どんなに暗黒な、面白からぬ出来事が起って来ましても、その暗黒さに心をくさらせてしまつては解決の道はつかないのであります。泣いても、わめいても、腹立てても、神に泣きついてても、そんな事で問題は解決する筈はないのであります。何故なら、泣きわめきも、腹立ちも、泣きつきも、懇請も、いずれも同じ暗黒の範疇に属するものであるからです。「暗黒」を解決するには「光明」をもってこななければなりません。「暗黒」によつ

て「暗黒」を解決しようと思うならば結局、其処には衝突か墜落か不測の災禍があるのみであります。暗黒があなたの周囲にわだかまっている時に、更にあなたの「暗黒なる想念」で暗黒を追加して見たとて一体どうなるでしょうか。だからそんな時には「神の智慧の光われに流れ入りたまいてわれを導きたまう。われは常に暗きことあらず」と念ずるように致しましょう。

(新装新版『真理』第9巻92頁)

到る処に自分の心の映像を見る

鏡に向って御覧なさい。其処に映っている自分の映像は自分の思う通りに動くでしょう。自分が微笑すれば微笑するし、自分が眼をつり上げれば鏡の映像の眼がつり上るのです。全く自分の支配下にあるのであります。併し、此処に一つ大切なことがあります。それは鏡の中の映像を動かそうと思つたら、自分自身が先ず動かなければならないと云うことなのです。黒住教祖は「立ちまかう人の心は鏡なり、おのが姿を映してや見ん」と詠まれましたが、人の心だけではない、自分の周囲にあらわれるあらゆる事件、境遇、身辺の事情等、悉く自分の心の映像であるのです。自分の心の映像であると云う事を知らないで、人を憎んだり恨んだりしては、憎み恨み排斥などの状態が、自分の心の反映として自分に加えられるのは無理がないのです。

(新装新版『真理』第9巻95〜96頁)

### 宥し得ない相手が出て来た場合

どんなに相手が自分に対して罪を犯していたにして

も、それはまことに憤激に価するにしても、吾々は神の御心をわが心として宥さなければならぬのである。「神はあなたを宥したまう。それゆえ私もあなたを宥すのである」こう相手を思い出したとき念ずるようにつとめるのである。最初その人を思い出したとき腹が立ち、悲しくなり、いまいましくなったにしても、真剣に相手を宥すべく努力して、機会ある毎に上記のように念ずるようになっているならば、それは念ずる言葉の力によって、ついに相手を真に宥し得るようになる。宥しがたい相手が貴方にあらわれて来ると云うことは、あなたの魂がまだ「宥す」と云う点で卒業していないから、魂の修行の課程として課せられるのであるから、早く卒業するように努めるがよい。愛する者を愛するのは誰にでもできることで手柄にはならない。憎む相手を愛する努力が修行である。

(新装新版『真理』第8巻115〜116頁)

### 相手の実相を観て和解するには

悪に抵抗するためにあなたの時間と精力をついやして

はならない。あなたの時間と精力とを「善」を見るためにこそ費すべきである。敵と云うような者を神は決して造りたまわないのであるから、敵と見える者も、その実相を観るならば、「神の子」であり互いに兄弟であるから、本来仲の好いのが当然であるのである。人間は誰でも、愛されたい、認められたい、理解されたい、尊敬されたいと云う願いをもっているであつて、或る人があなたに敵対するならば、彼はあなたに愛されたく、認められたく、理解されたく、尊敬されたく思っているのに、あなたが愛せず認めず理解せず尊敬せぬと思つて、反抗心を掻き立てているからである。あなたの愛と理解と尊敬とを相手にしっかりみとめられるように表現するならば相手は、愛せられている猫のように温和しくなつてしまうのである。（新装新版『真理』第9巻77〜78頁）

相手に和解するとは、

相手の実相の完全さを観る（こと）です

相手に和解すると云うことは、相手に宿る神性・仏

性こそ「本当の彼」そのものであつて「本当の彼」が完全なることを心で見詰めて、それを心で祝福するのである。併し、「和解する」とは必ずしも相手のいさぐ考えや計画や要求に言いなり放題に追従すると云うことではないのである。意見の相違は充分検討し戦わしたら宜しい。そして相手にやどる完全なる実相（神の子）をこちらがジツと心で見詰めれば、今まで相手が頑張っていた意見が突然又は徐々に消えて、調和した意見に變つて来るのである。マーフィー博士著、中嶋逸平氏訳『信仰の魔術』には、或る女にウルサク附きまつて迷惑きわまる男を、神の作りたる世界にはそんな人に迷惑をかける男は存在しない。彼は神の子で善良な好い人だ」と其の男の実相を心で見詰めることによって、その男は地球が彼を呑みほしたように来なくなった実例をあげている。この本は心に強く描くことが如何に実現するかについて皆さんの参考になるであらう。

（新装新版『真理』第9巻78頁）